

平城宮東院地区の調査（平城第584次）

奈良文化財研究所では、2006年度以降、東院地区的遺構の状況を解明するために、南半や西辺を対象とした発掘調査を実施してきました。2012・2013年度（平城第503次）以降、4年ぶりとなった今回は、西辺から東の中枢部にかけての遺構の様相をあきらかにする目的で調査を実施しました。調査期間は2017年2月6日から5月29日まで、調査面積は1,103m²です。

今回の調査区は、これまでの西辺の調査のなかで北東端に位置します。調査の結果、奈良時代の掘立柱建物6棟、掘立柱塀3条、溝5条、石列1条等を検出しました。これまでの調査成果により、東院地区的遺構は1期から6期までの6時期に区分できることがわかっています。今回の調査で検出した遺構は、奈良時代末の6期を除く、5時期にわたります。

最も顕著な成果は、奈良時代前半の長大な南北棟建物2棟を新たに検出したことです。これらの建物は柱筋を揃えて東西に並んでいます。西の建物は南北10間（約29.4m）、東西2間（約6.0m）。いっぽう、東の建物は南北10間（約29.4m）、東西2間（約5.4m）であり、東側に出が11尺（約3.3m）の廂がつくと考えられます。これらの建物の間には10尺（約3.0m）の間隙があります。これら2棟が同時期に並び建っていたのか否かについては、今後検討が必要です。なお、これまでの東院地区的調査では、これほど大型の南北棟建物が2棟並んでみつかったことはありません。また、東の中枢部に近接しており、これらの建物が重要な機能を担っていた可能性があります。

奈良時代後半には、今回の調査区の東辺で南北塀が南から続き、調査区北半で東に曲がることがわかりました。この南北塀は、南の調査区（平城第503次）において検出した東西塀に接続します。これらの塀



調査区全景（南東から）

により、中枢部があった東側の空間が区画されていたことがわかりました。また、南北塀の西側では、南から続く南北棟建物の全体規模をあきらかにしました。建物の規模は、南北9間（約26.6m）、東西2間（約6.0m）で、西側に出が10尺（約3.0m）の廂が付属します。この建物と、西の調査区（平城第481次）で検出した同規模の南北棟建物は、柱筋を揃えて建てられています。これらを東西の両端として、両棟の北辺と南辺を結んだ長方形の範囲に、複数の建物が柱筋を揃えて配置されていたことが新たに判明しました。したがって、東院地区西辺の一角には、東の南北塀と南の東西塀により区切られた、企画性の高い空間が設けられていたことになります。

なお、奈良時代末には、今回の調査区では建物が徐々に少なくなり、最後には建物がなくなります。

今回の調査では、東院地区西辺における土地利用状況の一端があきらかになりました。とくに、奈良時代末にかけて遺構が少なくなる傾向がみられました。これは、今回の調査区が、西辺の中でも東端にあたり、東の中枢部との間隙に位置する東西に狭隘な空間であったことと関係すると思われます。狭隘であったゆえに、当初は南北棟建物が目立ち、次第に建物のない空間として利用されるようになったと考えられます。

5月21日には現地説明会を開催しました。5月とは思えない炎天下にもかかわらず、519名の方々に足を運んでいただきました。日陰もない中で熱心に耳を傾けて、時にはご質問いただき、関心の高さを実感しました。今後も東院地区での発掘調査を継続し、また新しい成果をご紹介していきます。

（都城発掘調査部 山藤 正敏）



現地説明会の様子（南西から）